

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：25502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720101

研究課題名(和文) 絵入根本の造本様式についての基礎研究

研究課題名(英文) Basic reserch about the style of Eiri-nehon

研究代表者

木越 俊介 (Kigoshi, Shunsuke)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：80360056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：歌舞伎台本を挿絵入りで刊行した本が19世紀初頭から発生する。これらは「絵入根本」と呼ばれるが、本研究はその成立から定着についての調査・分析を行った。当初は、歌舞伎小屋そのものも含め、読者に疑似体験させるような方向性も窺えるが、徐々に、テキストを読みながら各演目を役者の似顔絵とともに鑑賞する様式に定着してきたことが判明した。また、出版を手がけた本屋の戦略をも視野に入れ、新たな商品として、絵入根本がどのように位置づけられたのかをも探った。

研究成果の概要(英文)：The scripts for Kabuki plays have a special name in Japanese, "Nehon". The version of "Nehon" that includes pictures are called "e-iri"nehon, or scripts with pictures. It is quite possible that the purpose of these earlier books was to have the reader imagine the actors on the stage and in the settings that are portrayed in the book. But later books are drawn in a more real manner and more importantly the actors are included. So kabuki theater in book form becomes a specific genre in publications in Japan.

研究分野：近世文学

キーワード：絵入根本 出版 19世紀 歌舞伎

1. 研究開始当初の背景

絵入根本の定義は、「歌舞伎の台帳を印刷刊行したもの。多く絵入りであることからの名称。読本の一分野と考えてよいもので、体裁は半紙本が標準で冊数は不定。内容は台帳形式で、舞台書、せりふ、ト書などから成るが、台帳の翻刻とはいきれず、刊行に際し、多少の省略、場割の変更などが認められる。挿絵も読本の挿絵の様式をもつ役者似顔絵である。初冊の冒頭に数葉の極彩色の挿絵を持つ」(土田衛、『日本古典文学大辞典』岩波書店、1983)とされている。そのジャンルの沿革としては、宝暦12年(1762)、江戸で根本の本読み会が行われ、大阪においても、奈河亀輔が同様の催しを行い、出版物としては、天明4年(1784)刊『思花街容性(おもわくくるわかたぎ)』に端を発するとされている(浜松歌国『南水漫遊拾遺』の記述による)。ただし、「絵入」となるのは19世紀に入ってからの享和年間(1801~4)に至ってからであり、専ら上方において刊行された。

研究史としては、守随憲治・秋葉芳美『歌舞伎図説』(1934年)に歌舞伎関係書として図と解説が備わるのが早く、須山章信「絵入根本目録(未定稿)」(『青須我波良(帝塚山短大)』16、1978年5月)は『国書総目録』をもとに、五十音順で書名ほかを並べ、所蔵先を記した目録である。本格的な研究は近年になってからで、北川博子「役者絵本の流れ」『浮世絵芸術』114(1995年1月)は、上方における役者絵本が、一枚刷りの役者絵と絵入根本に分化していったことを指摘し、さらに「役者絵本は役者絵だけの問題ではなく、上方における読本の問題にも広がっていくのではないだろうか」とし、「根本と読本の造本が次第に類似していく点を考えると、上方では浮世絵の絵師を媒介としてこの二つの影響関係を考える必要があるように思われる。しかし、演劇研究において根本は未だ未開拓の分野であり、また、この頃の上方の読本は江戸のものに比べ非常に評価が低く、ともにこれからの研究が待たれるところである。これらは役者絵本の直接的な問題ではないがそこから波及する文学史上の大きな問題であろう」としている。また、広く役者絵の問題を総合的に把握したものとして松平進の一連の研究があり、とりわけ『上方浮世絵の再発見』(講談社、1999年)、『上方浮世絵の世界』(和泉書院、2000年)では、上方の絵師について詳しく言及されるが、絵入根本そのもの

については補助的な資料に止まっている。

また、赤間亮「歌舞伎の出版物(一)」『岩波講座 歌舞伎・文楽』第4巻(岩波書店、1998)、同『図説 江戸の演劇書 歌舞伎篇』(八木書店、2003年)では、絵入根本の歌舞伎出版物としての位置づけが記されており、絵入根本の前史としての「狂言読本」の存在や、絵入根本の一部について解題が付されている。近年では、歌舞伎台帳の本文を検討する上での一資料として言及されることが多く、河合真澄「絵入根本『俳優浜真砂』をめぐって」『女子大文学(国文篇)』54(2003年3月)は、その元となった歌舞伎台帳(『金門五三桐』)との比較を通し、「絵入根本の本文は、文脈の通じにくい箇所や明らかな誤りを多く残していて、綿密な校訂を経たものとは言い難い。台帳を原本として作られた本文であると思われるが、直接芝居に関係しない校訂者の手で編集された可能性が窺える」とし、「絵入根本の本文研究は今後の課題であり、台帳と併せ読む事によって新たな視野が開ける事が期待される」としている。実際、四本奈央「絵入根本『宿無団七時雨傘』(紹介と翻刻)」『文学史研究』45(2005年3月)「『宿無団七時雨傘』論—新出絵入根本から見えてくるもの」『文学史研究』46(2006年3月)は、こうした点を進めた研究である。もっとも、歌舞伎研究の立場からすれば、絵入根本は演出などの問題を探るには恰好の資料といえるものの、テキストとしての価値が相対的に高くないため、いまだ研究が遅れていることは否めない。

2. 研究の目的

本研究は、とりわけ絵入根本の造本様式を問題とする。これにより本屋の戦略が明らかとなり、歌舞伎研究にとってはもちろんのこと、読本や19世紀の出版研究にも資するところが大きいと予想される。また、江戸と大坂の文化様式の相違を知る上でも大きな意義を有する。具体的な問題設定は以下の通りである。

ジャンルとしての「絵入根本」成立をめぐるとの問題の再検討
ジャンル確立期に見られる様式上の揺れ
定着期以降の典型的な様式のあり方と他ジャンル(読本・名所図会)との影響関係

3. 研究の方法

絵入根本の基礎調査を徹底的に行う点

に大きな特色がある。さらに、こうした書誌調査に加え、絵入根本刊行に關与していた本屋の活動にも注目し、18世紀後半に手広く役者絵本を手掛けていた大坂の塩屋長兵衛と新規参入の河内屋太助を軸に、他の地域(京・江戸)の本屋が参入しつつも、結果的に河内屋太助が株(出版権)を独占するようになる過程を、出版関係の記録類を繙く事で明らかにする。

4. 研究成果

ほぼ計画通りに調査・研究を行った結果、絵入根本が享和年間に発生し、徐々に定着していくまでの具体的様相を明らかにすることができた。簡略に記せば、当初は、歌舞伎小屋そのものも含め、読者に疑似体験させるような方向性も窺えたが、徐々に、テキストを読みながら各演目を役者の似顔絵とともに鑑賞する様式に定着してきた。この点を、一点一点の挿絵を具に調査することで明らかにした。

さらに、こうした様式の定着がおおよそ文化5年(1808)であったことも判明した。この過程における、出版を手がけた本屋(河内屋太助・塩屋長兵衛)各々の傾向や方向性の違いや戦略をも視野に入れ、新たな商品として、絵入根本がどのように位置づけられたのかをも探った。

また、同時期に刊行され始め、絵入読本とは様式の上で共通点が認められる、後期読本の濫觴にあたる曲亭馬琴『月水奇縁』についても研究し、成果を発表した。

さらに、これら絵入根本と絵入読本との接点を探るべく、浜松歌国という狂言作者に注目し、彼の手がけた読本作品を分析することで、両者の共通点ならびに相違点を分析した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

木越俊介、絵入根本の成立から定着まで、国語と国文学、査読有、91巻5号、2014年、pp.63-74

木越俊介、詐術としての読本 『著作堂旧作略自評摘要』にみる作為の評価、読本研究新集、査読有、6、2014、pp. 5-20

〔学会発表〕(計 4 件)

木越俊介、絵入読本と絵入根本の接点、2014年12月13日・同志社大学、演劇研究会12月例会、単独

木越俊介、絵入根本の造本について 享和年間を中心に、2012年12月9日・関西大学、絵入本ワークショップ、単独

木越俊介、『忠臣水滸伝』の白話と日本語の遊び方、2012年9月1日・中国・西安大学、日中共同シンポジウム「日本と中国、中国と日本 文学からの接近」、単独

木越俊介、絵入根本の造本 発生から定着まで、2012年8月27日・中国・ハルピン(ハルピン工業大学)、ワークショップ「日本文学の中の外国文学、外国文学の中の日本文学」、単独

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
特になし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木越 俊介 (Kigoshi Shunsuke)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：80360056

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：